

目的 わが国においては独居老人の絶対数、構成比ともに増加傾向にあり、この増加要因と考えられる核家族化、家族形成の習慣・価値体系の変化、出生児数の減少、未婚老人の存在などは今後軽減、解消するとはいえない。独居老人の問題は、将来ますます重要な意味をもつようになると考えられる。本報告は独居老人にとって、特に重要な課題の一つである社会的孤立、孤独について、その程度をめぐり、その規定要因を明らかにする。また、社会的孤立と孤独との関係についても分析する。

方法 長野市に在住する65歳以上の独居老人のうち、寝たまりの独居老人を除き、無作為に250名を対象として抽出した。面接者が老人の家庭を訪問し、20分～2時間、一対一の個人面接調査を行なった。調査時期は昭和55年2月～5月。対象者のうち、調査の全面・部分拒否55名、不在42名、死亡・転居等11名、住居不明21名であり、有効票は121であった。調査の全面・部分拒否のなかには社会的に孤立し、孤独である老人がかなり含まれていると予想される。

結果 独居老人は同居老人に比べて社会的に孤立し、孤独であるという印象を受けやすいが、すべての独居老人が必ずしも社会的に孤立し、孤独であるわけではなく、約7割弱の老人は孤独ではないと感じている。社会的孤立については、子どもの有無、近隣との相互交流の有無と相関がみられ、孤独は独居になった理由と相関がみられた。社会的孤立と孤独の程度を組み合わせて4タイプに類型化すると、社会的に孤立してはいないし孤独感もないというタイプが最も多くみられた。社会的孤立と孤独の間には相関がみとめられた。